

論文の内容の要旨

森林科学 専攻

令和元年度博士課程進学

氏 名 陸 丹

指導教員名 山 本 清 龍

論文題目 池坊立花の風景表現の技法と風景観の変遷に関する研究

池坊立花は多種多様な植物によって風景を表現するいけばな様式であり、室町時代に成立した。立花を記録する史料として花伝書、花書、花形絵がある。とくに、花伝書は立花の制作に関する秘事奥義を記しており、立花の構成理論が構築される天文年間に多く現れている。また、17世紀前半に入って立花の理論が確立されると、花伝書とは相反する性格を持つ書物が刊行されるようになった。特定の受伝者のみが眼にする花伝書に対する、立花の大衆化を図るための一般に公開される花書である。さらに、風景表現の方法を文字として記述する花伝書、花書に対する、立花の実態を写す花形絵である。花形絵は江戸時代初期から現在まで、同じ流派によって継続的に作られて残され、系統的に風景表現の変遷を追うことができる価値ある史料である。しかし、そうした史料を研究資料として位置づけて分析し、考察を加えた研究成果は少ない。

本研究では、花伝書、花書を解読した上で花形絵を分析し、池坊立花の風景表現とその歴史の変遷を明らかにすることを企図した。具体的には、①立花の役枝、使用される植物、立花の表現内容から構成の発展過程を把握、整理し、風景表現の変遷を把握する枠組みを提示すること、その上で、②立花の構成、素材、表現技法に着目し、立花の風景表現の特徴と変遷を明らかにすること、③立花の風景認識と風景表現の技法にみる風景観について論じ考察すること、の3点を研究目的とした。

第一章では、いけばなと立花の歴史を概説した上で、研究の背景と目的、研究の位置づけを示し、研究方法、用語の定義、論文の構成について述べた。

第二章では、立花の役枝、使用される植物、立花の表現内容から構成の発展過程を把握、整理した。まず、立花の構成では、「真」と「下草」で構成された立て花は、室町時代に発展し「真」「副」「正真」「請」「流枝」「見越」「前置」と7つの役枝によって構成されるようになった。また、江戸時代にはあしらいが出現し、同初期にあしらいとされていた「扣」「胴作り」が同中期には役枝の「控枝」「胴」へと昇格し、あしらいの分化と役枝の発展とともに立花の構成が完成されたと考えられた。次に、立花に用いられる植物とその配置には複雑化と多様化があった。立花には常緑針葉樹とりわけマツが多く用いられ、次いで落葉広葉樹が用いられていた。しかし、用いられた常緑針葉樹の種類には多様性はなく、限定された種類の植物が歴史を引き継いで様々な作品に用いられていた。立花が確立される以前から、制作目的と植物の状態によって植物の使い分けが行われ、立花構成の確立以後においては、植物の多様な部位、それらの異なる状態が制作意図を持って使用されていた。さらに、シャレボク（晒木）など採取直後の生の植物ではない素材の使用も立花構成の確立以前からみられ、現代に至っていた。立花の役枝、使用される植物、立花の表現内容にみられる構成の発展過程から、風景表現の変遷を把握する枠組みを提示した。

第三章では、第二章の結果をふまえて、立花の風景表現の技法を検討した。まず、立花の構成に表現される遠景から近景までのそれぞれの視距離帯の風景認識を取り上げ、その風景認識にみられる空間的広がり、注視対象、連続性について時代による変遷を把握、整理した。また、江戸時代の初期と中期では、立花の役枝の前後の配置によって遠景と近景が表現されていた。とくに、同初期の風景表現では遠景に重点が置かれていると考えられたが、その風景認識は安定したものではなかった。さらに、花伝書から概括的な風景認識しか読み取れなかったことをふまえると、江戸時代初期から同中期にかけては風景表現の模索期と考えられた。加えて、この中期にみられた花書の風景表現の描写と立花の役枝の変化を考慮すると、同中期の風景認識の重点は近景へと移行し、遠景に対する認識が安定したと考えられた。同後期には、中景の分離、強化により風景認識と風景表現において連続性が確保、維持されたと考えられた。江戸時代中期から後期は、花書に風景表現の分類など具体的で新しい風景描写の技法が現れており、風景表現の発展期と考えられた。近代に入ると、中景表現と風景の連続性を重視する傾向がみられ、立花の各役枝によって遠い山から近い集落までのそれぞれの風景表現の手法が詳細に規定され、風景表現の技法の成熟期と考えられたが、その一方で、表現は定式化、固定化されていた。現代では、近代に固定化された表現型式を打

破し、新たな風景認識が芽生えた時期と考えられた。小括すると、立花は遠景から中景、近景まで、重層的な空間スケールで風景を認識していたことが示された。

次に、立花に使用された植物の種類と配置が表現する風景的意味を把握、整理した。各時代の立花に使用される植物は、山の風景と仏教的心象風景の両者を表現する常緑針葉樹の割合が最も多かった。一方、使用される植物とその配置の原理、原則は、立花の発展過程の歴史に通底するものと変化するものの両者があった。特殊な表現を除けば、江戸時代初期には一つの作品中に同種の植物を1箇所にもみ用いていたが、同中期からは複数箇所に用いるようになり、空間的広がりのある風景表現、近景から遠景までの奥行きのある風景表現が創造されていたと考えられた。花材の種類を役枝とあしらいの別に比較すると、後者で種類に多様性があった。また、あしらいに高木の常緑針葉樹が用いられたことは遠景を作品に取り入れる遠近表現の手法の一つと考えられた。

最後に、造園用語を援用し、立花の風景表現の技法を、①自然、生活環境などの象徴的風景、精神世界的心象風景と季節を表現する「見立て」、②名所などの実在する場所を模倣する「縮景」、③作品の外部空間、素材を立花に連携させ、外部の風景要素を取り入れる「借景」、④言葉や立花の構成、役枝のデフォルメ的变化によって風景を表現し、造園用語に類似性を見出せない「その他」の4つに区分して把握、整理した。室町時代に見立て、借景、言葉による風景表現、自然に従う、作庭に倣うなどの表現技法が立花に取り入れられたが、現代まで引き継がれているのは見立て、自然に従うの2つの技法である。見立ては他の技法との併用が多く重要技法と考えられ、江戸時代から現在まで継承されていた。また、江戸時代にみられた立花の構成と役枝の発展は、近代の各役枝に風景的意味を持たせる見立て表現の確立の礎と考えられた。現代では、近代まで伝承された技法が引き継がれ、役枝の誇張と省略という新たな役枝のデフォルメ的变化、作者の心象風景を象徴する花形、言葉で風景を表現するなど、風景表現の技法の発展がみられた。

第四章では、立花の風景認識と風景表現の技法の発展過程を総括し、池坊立花の風景観について考察した。歴史を概括すると、草創期の立花は飾り花の性格が強く、江戸時代に入って風景表現の性格が強くなっていた。とくに、立花の表現にみられる視距離帯別の風景の認識の重点は、江戸時代初期の遠景から同中期の近景へ移行し、同後期中景の分化によって、近景から遠景まで連続し奥行きのある風景を表現していた。近代に入ると、立花の構成の固定化とともに象徴的風景の表現が強化され、現代では、視距離帯の認識と表現は多様化し、立花は多様な風景を表現するようになっていた。このように、立花の構成の発展によって立花が表現する風景観は時代とともに変遷していた。

歴史的には、池坊立花に表現される風景は山の風景に集中するが、山頂に視点

を置く風景ではなく、生活域や里山を視点とする風景など、生活の場から眺める「山の風景」である。しかし、作品の大きさ、使用する花材が限られる立花の風景表現には限界があり、見立ての出現によって新たな風景表現が可能になったと考えられた。見立ては、時代の経過とともに具体化、多様化し、技法の成熟によって外部の風景を立花の風景表現に取り入れる借景的技法が消滅し、実景を立花に描写する縮景が生まれたと考えられた。同時に、見立ては実景だけでなく精神世界を象徴的技法により表現し、仏教、神話など同時代で共感できる風景表現から時代を経て個別の状況、心情をふまえる表現へと変化していた。現代では、より幅広く、明快に風景を表現するようになり、見立ての表現技法を補うため役枝に誇張、省略などの技法が用いられるようになったと考えられた。自然風景を人間の生活に取り入れて表現する点で作庭と立花には共通性がみられるものの、立花では見立てを技法の中心に位置づけて風景表現を実現し、実在する風景を直接に表現するのではなく、見立てによって風景を連想させることが重要である。立花で見立てが技法の中心となった観点から言えば、作庭との間に共通点を見出せる一方で、借景の技法の例は少なく、実物との関係性を発展、継承できなかったと考えられ、操作対象として実際の土地を扱う作庭とそうでない立花とで表現に相違がみられた。また、立花によって風景を表現し風景観を伝える上では鑑賞者に立花に関する知識と素養が求められるが、この点は写意庭園の鑑賞と同じと考えられた。

第五章では、研究結果と考察をまとめ、研究課題に言及した。立花の風景表現の研究をさらに深化させるためには、使用される植物など立花と庭園の体系的比較、他の学術の領域における風景観の整理の参照、立花の知識の普及に関する提案が必要であり、今後の課題である。